

三ツ峠における鹿の増大と温暖化による植生への悪循環の現状

中村光吉 三ツ峠山荘・三ツ峠ネットワーク代表

[これまでの植生の経緯]

三ツ峠におけるこの7年間のニホンジカの増大により鹿柵の外の植生は壊滅的な状況。鹿柵の中には元々の植生は残っているが、テンニンソウやカリヤスモドキのようなイネ科植物の増大している。

春から秋までは定期的にボランティアの方たちによる除伐作業が行われていることにより多様な植生はまだ維持されている。

ここ数年の温暖化による植生の遷移は三ツ峠におけるラン科植物にとって、菌根菌という根を通し自分に対応する菌類を栄養源にしているため土中の菌や菌根菌そのものが養分を取りづらくなっている印象がある。結果発芽率の減少やアツモリソウの大きな株も花がつかないことにつながっている。

またイネ科植物は短い間に群落化し根が密生するため根ごとの除伐が難しく、上部の刈り取りのみをおこなっている。結果として土壌の水分を吸い取られてしまうため全体として乾燥化が進む。ヤマアカリなどが増大していることも好ましくない。

[既存の防鹿柵を飛び越え侵入し始めた]

2021年秋ごろ既存の鹿柵への鹿の侵入が始まった。立木を利用したり、山の傾斜を利用して飛び越えたりと侵入経路も様々でその適応能力は驚異的であった。侵入経路の排除と早急に鹿柵の嵩上げを実施し対策をした。

[新しく起こり始めた問題]

鹿の食害と温暖化や気候変動が相互に悪影響し全体の植生の荒廃がすすむ。

これまでにはなかった問題が起こり始めた現状を踏まえ、今検討する解決策を提示する。

[子鹿の死骸が示すもの]

最近のことであるが三ツ峠や櫛型山のように希少な植物は柵により守られているが柵の外は殆ど毒草だけになってしまった場所では、以前毒草ではない植物により成長した成獣の鹿はその後毒草にも少しずつ耐性を持つが、既に有毒な植物しか無い状態で生まれた新たな子鹿は親鹿と共に有毒な植物を食べるしかなく、それらにより中毒死している個体が最近よく見かけられる。

鹿の死骸が増えるとそれを漁りにクマが来る。ナラ枯れで木の実などの餌の無いクマの肉食化が進み人への被害も懸念される。

死にかけの小鹿を見て登山者は助けてほしいと小屋の方に頼み込みに来るが、一般の登山者は山で何が起きているかは分からない。世間の認識に対しても危機感を覚えている。